

Title	昭和五年秋期史學研究旅行記：(目的地)諏訪、天龍峡方面
Sub Title	
Author	篠崎(Shinozaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.3 (1931. 9) ,p.204(546)- 210(552)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310900-0206

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地にして、こは皇母坂にて後村上天皇御生母新待賢門院廉子の御墓の地を傳へ、又檜尾陵と同一形式の檜尾塚は高貴の御方の御陵と稱し、何れも近々陵墓参考地として御指定に相成るゝの事、余も先年親しく拜調せしこともあり、寔に欣喜すべきである。因に先年發見の當寺過去帳の報恩追資中に、當寺に御縁故深い、長慶天皇には御髪を山内に埋められしと附記せられて居るので、右の御塚を其の御埋髮の地に擬せられて居る。

次に特記すべきは當寺を中心として組織されし大日本楠公會のことで、こは余の知友たりし當寺顧問故山中梅園師が思想國難の秋に楠公精神の發揚を首唱せしものにかゝり、昭和二年十月大阪に於て發會式舉行以來東西有志の勢援を得て、燎原の火の如く増々進展し、着々として新事業を起し、又去る五月廿三日以來數日間、山内に於て楠公六百年祭を舉行し、日々數千の參列者を見るに至つた。

本書はこの六百年祭に際し、記念出版せられしものにかゝり、當寺の沿革より大日本楠公會の近況に至る迄を詳述せらしものである。終に余は編者富賀鹿藏氏の勞を謝し、合せて大日本楠公會首唱者故山中梅園師の靈を敬申する。(昭和六、六、二九、武田勝藏)

都久志 創刊號

(福岡市都久志 刊行會發行)

今次、九州の郷土史家筑紫賴定氏外三氏の發起にかゝり、都久志刊行會が組織せられ、其の機關雜誌として「都久志」が年六回刊

行せらるゝこととなり、先づ創刊號を惠投せられた。同會は又郷土史料寫眞、郷土文獻、稀書等の刊行を企畫し、既に刊行目錄も發表せられて居る。

九州北部が、我が古代文化の中心、近世に至る迄の外來文化の關門、はた外寇擊退の第一線たる等は周知の史實で、この中には先人未決のまゝに残され、將來に於て決せらるべき幾多の難問題が存して居る。仍つて如上、郷土史家の奮起は學界のため慶賀の一事である。同地にありて既に「筑紫史談」等の郷土史研究雜誌が刊行せられて居れば、其の姉妹と見るべき本誌は共によく協力し間隙なく郷土史研究上健全なる發展を切望するものである。因に本誌所載の長沼賢海九大教授の「九州の文化と博多」の一篇はお國自慢の一卷で面白く拜讀した。(昭和六、七、一〇、武田勝藏)

彙 報

昭和五年秋期史學研究旅行記

(目的地) 諏訪、天龍峽方面

十月十日の夜十時五分、飯田町驛を出發、一行は伊木先生と學生四人。

翌朝、深い霧につつまれた諏訪を通つて辰野で下車、直に伊那電鐵に乗換へた。伊那谷を走る當車は凡そ賃金の高きを以て有名であるが、又、其の軌道にカーブの多い事も記憶さるべきである。上元善光寺を車窓に筆み、坂道を通過して、八時半駄科驛に着く。

路を上つて久堅村南原文永寺に入る。山門に額あり。瑠璃閣と題す、建武二年、小笠原貞宗の建立で、作者は飛騨内匠と傳へ、俗に左甚五郎柄攻一丁楔の名作と云ふ、兩袖に木造の増長天、多聞天の立像(共に高五尺二寸)があり何れも鎌倉時代の特徴を出した作で、少くとも文永年間を下らぬものと推定される。

本堂には木造の阿彌陀如來(高四尺八寸五分)が安置されてゐる。説明の標には「着衣襞皺整齊ニシテ刀法尖銳ヨク足利時代彫刻ノ本領ヲ發揮シタリ、傳ニ武田信玄此像ヲ神峯ノ西麓ヨリ迎ヘ奉リテ本寺再興ノトキニ安置スル所ナリト云フ」と記されてゐる。寺の住職は生憎く不在で見ざるべき筈の古文書が見られなかつたのは残念だつたが、慶長廿乙卯仲秋吉日千村平右衛門利長當寺へ寄進の大般若經文を見せてもらふ。

境内には一本の見事な老松と一箇の古めかしい梵鐘がある。梵鐘には銘は無いが、總高五尺四寸、龍頭一尺、口徑二尺六寸四分、様式手法は鎌倉時代の特徵を發揮し、其の下帶部の流水紋は殊に優秀なものである。本堂から山門の方へ下りて來る右手の畠の中に「國寶」と書いた新しい大きな標が立つてゐる。其處には石室に安置された小さな五輪塔があつた。此五輪塔は弘安六年神峯城主知久敦幸が造立したもので、覆屋(石室)も他に類例を見ない稀有なものであるが、更に注意すべきは其内方屋根裏に刻されてある銘文で、知久氏の世系が神氏なることを證すべき貴重史料である。

文永寺を出て一同は再び電車に乗り、直に伊那川路驛で下車、

第二の自由なる音節本體論を以てす
壘秀山開善寺は前の文永寺に比して立派な堂宇を有ち、清楚たる境内も氣持が好い。此處にも瑠璃閣と稱せられる山門があつて、文永寺同様、飛騨の内匠の造營で、俗に左甚五郎柄攻一丁楔の名作なりと稱してをる。

空はすでに晴れ渡つてゐた。高い山々の峯から、美しい伊那谷へ吹き下して來る風は境内の松林に入つて颯々響いてゐた。我々は清澄な秋の陽光を背に浴びて本堂の方へ歩いて行つた。皆、元氣だつた。

案内されて寺の寶物を見せてもらふ。先づ此の附近の谷で發掘されたと云ふ石器や土器、三連鈴、馬鐸、古鏝、古劍、それに加へて相當數多く石鏃が列べられてあつた。又た古文書類では、

建武三年七月十八日足利直義願文

無充書、清水寺へ新田義貞追伐成就ノ祈願

延文元年十月廿一日足利尊氏御教書

頓宮肥後彌三郎充本領安堵ノモノ

五月三日豊臣秀吉朱印狀

岐阜宰相充朝鮮渡海ノ命令

文祿五年極月九日兩奉奉定書

開善寺充諸役御免并殺生禁斷以下ノ事

慶長 四月廿五日朝日受永證狀

開善寺球山和尚充寺家門前ニテ卅石相違ナシ云々

卯月廿九日足利義氏書狀

壬生上總介充德雪大納言和眺ノ儀

閏正九日千宗易自筆書狀

備宰相充竹百本ノ禮

天文十六年丁未臘月初六日前妙心泰秀宗韓筆速傳和尚賀頌

(慶長三年)速傳自筆消息 まつお殿後室充
(九十歳ノ時ノ文、若キ手、カアリ)

開善寺住持宗版結制及解制案八通

開善寺祠堂記

等があつた。

次に開祖大鑑禪師の木像を拜見する。製作の年月は記されて無い。開善寺史には「古色蒼然、眼光炯々として威靈人に逼る」と形容されてゐるが、極めて寫實的で、支那人の面貌をよく示してゐる。この傍らに當山中興の祖速傳和尚の木像あり、江戸時代の作と思はれる。此等の像の少し前の所に縮刷大藏經を納めた美事な轉輪藏があつた。我々は順次にそれをくるくるさまはして見た。

それより更に奥に入つて明治天皇勅書を拜見する。當山中興の祖、速傳和尚に對する徵號宣下のものである。慶應三年五月二十六日と記された日付のうち、御宸筆である二十六だけが特に書風墨色の變つてゐるのをよく拜見した。尙ほ當山三世大翁禪師の畫像(讚は南禪寺天隱和尚)及び傳吃又兵衛筆、洛中屏風(六曲半双)等を見る。此等のものの他に特に我々の印象に残つたものは、其處にならべられてあつた美しい古高麗の花瓶であり、古めかしい幾つかの皿鉢である。古鏡も一面あつた様に記憶する。

飛來峯、含玉池と風雅な名稱を付せられた堂後一帯の林泉、紅綠ざり／＼に色ざられた美觀を賞してから、我々は任職に面會した。やがて一同が寺を出よう云ふ折に、伊那の郷土史家市村威人氏に會つた。氏はわざわざ我々に同行して下さる爲に來られた

のであつた。開善寺を出て一行六人は氣持の好い程晴れ渡つた伊那谷を愉快な氣持で天龍峽へ下つて行つた。(近山記)

これから天下の絶景天龍峽の見物に出かけるわけだが、抑々此の旅行の觸込みに名物焼鳥があつた。而るに生憎く、シーツン・アツプとは一同がつかり。兎に角道を少し下ると姑射橋に出る。幅廣頑丈な吊橋だ。其の下數丈と思はれるところに左から右へ下る水は流石威勢がよい。是から川下數丁の間が言はば天龍下りの本曲と謂はれる處、橋を渡つて暫くは山徑に入る。可成り険しいところを上下しながら樹間を通じて對岸が見える。而し谿深くて水は直接見えない。が中程稍々廣い臺地に出ると始めて眼界が開ける。路は又岸壁を離れて奥に深くカーブして下り、之を更らに登りついたところが巨岩龍角峰である。一同此の岩上に腰を下す。甚だ危険千萬、一度び足を迂らさんか下は全く千仞の谷だ。是から川を逆に眺める。此の眺め一等佳し。今來たばかりの姑射橋が向ふに少く懸り、それからして大小奇岩の間を縫うて下る川筋を一眸の下に見下すところだ。まるで足下に銀河を踏んだやうだ。歸りは本道を廻らうとしたが途中路分らず田圃路を教へられて抜ける。吊橋を渡れば向岸を一巡して來たわけである。直ぐ側の料亭に入る。川に面した奥座敷で晝食をまつた。

時間は接迫する。而かも今日中に光前寺を訪ねやうといふ豫定だ。食事もそこ／＼にして例の電車に乗り、赤穂驛に下車したのは三時半頃か。驛前から五六町歩く。これから自動車を備うて車一杯の野路を山麓に向つて西走す。道悪るし、竟に山門前數町にして車進まず歎。此の邊から光前寺の御堂が山間に見える。一行

車を待たせて急ぐ。山門を入れれば直ぐ石疊で、左右の土堤には大杉數本、スク／＼と程よい間隔を以て立ち並び、大葉の海棠がからみついて紅葉したるに、夕陽の照り映えてゐるのも風情がある。中門を入ると前庭廣く、正面の庫裡大口を開いて吾等一行を迎へるやう。壊はれかけた堂の構へ、其の内部のがらんどうとした寂しき素朴さ、天臺宗の山寺さいふ感じ一體に強く身に覺える。堂に上れば、和尚さん經文を開きながら早速名高い早太郎、犬の話が出る。市村氏も、『早太郎は狒々を取組んで何方も倒れたと言ひますよ』と、S君、『いや、でも此には早太郎恙なしとあります』と、縁起文を讀んで反問す。此のところ早太郎恙ありや、なしや。

その縁起に、『人皇九十五代花園帝の御宇延慶の頃當山に畜ふ所の良犬あり、勇猛にして山野を跋渉する事恰も飛鳥に似たり爲に野獸恐れ怖き姿を匿せりと云ふ。依つて其名を早太郎と云ひ又其毛色灰色なりしが故に灰毛太郎とも云へり。……祭祀の日を待ち穢兒に代るに早太郎を以てし、これを櫃に容れ廟後に供へ、兒と共に信心堅固に不動尊を祈念しつゝ其様を窺ふに丑満の頃廟社の震動怪神の問答常の如く、櫃を破りて將に是を捉へんとするや早太郎中より奮躍嗥吠して其勢當るべからず、忽ち怪神に鋭牙を加ふ、怪神力を盡し挑み闘ふと雖も遂に早太郎の爲に斃さる。明且里民等往いて是を見るに其怪神こそ利牙角の如く眼光輝き渡り甚だ恐怖すべき數百年を経たる老狒なりき。而して良犬は恙なし。……』

次に古文書其他の材料を見せて貰ふ。

天正八年庚辰閏三月十八日武田氏朱印定書 華藏院充

慶長三、三月廿八日羽柴修理生双寺領寄進狀 光前寺充
寛永九年七月廿四日天海信濃國光前寺諸法度 光前寺充
寛永十年癸酉三月十七日天海自筆條目 光前寺へ出せるもの
佛畫には

傳弘法大師筆愛染明王(二幅)

傳金剛筆阿彌陀佛

十王像(十幅)

一地藏菩薩

傳中將姫筆十三佛

傳牧溪筆十六羅漢(三幅)

元信筆鷹繪屏風(双幅)

その他數幅あり、中には國寶物かとも思はれるものもあり、收穫最も多く、其の初め未知數ださせられてゐた此の山寺に斯くも優秀なる珍物ありとは圖らざりき。

先生、『これはいゝですね』『暗くて残念ですね』を交替に繰りかへし、如何にも残念さう。その上、前途を急げば、折角の材料もゆつくり鑑賞する能はず、何時しか屋内はとつぷり暮れ倉惶として辭去する我等の靴紐をしばる手許も覺束なげであつた。走るやうにして山門を出る。上り電車發車の時刻まで餘すところ僅かに十數分、而かも驛までは一里足らずの路を急がねばならぬ。T君、C君、S君、Oの順でドン／＼自動車めがけて馳け付ける。先生はと見れば一町ばかり後、市村翁は更に後れてこれも驅け足危いところで電車の中に合ひ、此處で市村氏と別れ、豫定は急がしいながらに進行す。(大島記)

辰野から上諏訪まで汽車がないので自動車を走らせる。電車自動車を完全にゆられて上諏訪に着いたのは時すでに八時すぎ、ぼたん屋で氣持の良い温泉にひたり食事をすると俄に今日一日の疲をいだし、麻雀やらうかさ云ふ相談も無駄なことをおこなしくねてしまった。

あくれば十二日の朝、天高く馬肥ゆかさ云ふ秋晴の氣持よき、その上今日は昨日ほどあはてる必要のないと云ふ、即ち諏訪神社丈けで歸れると云ふので皆元氣をさりかへした。そして今朝から橋本先生が東京から夜汽車にて來られ例の元氣の良い聲で話されるので、一行も大分賑かくなつて來た。

九時をすぎた頃に一行は自動車にて諏訪の盆地を氣持の良い日をあびて諏訪神社の上社に向つた。この諏訪神社は上社と下社に分れて居り、下社は下諏訪にあり、上社は上諏訪より又大分上に行つた中洲村にある。祀つてある神様は古事記に「其建御名方神千引岩撃手未而來言。誰來我國而。忍忍如此物言。然欲爲力兢。故我先欲取其御手、故令取其御手者。即取成立氷。亦取成劍双。故爾懼而退居。爾欲取其建御名方神之手。乞歸而取者。如取若葦。搯批而投離者。即逃去。故追往而迫到科野國之洲羽海。將殺時。建御名方神曰。恐。莫殺我。除此地者不行他處」と出てゐる建御名方神である。この神様は御神體は普通の神社の神鏡とか云ふの品變へて、山が神體であるとの事である。

諏訪の湖水より南にゆき盆地の一隅に氣持の良い森につつまれて鎮座します。官幣大社であつて相當に大きいものである。先づ例によつて參拜し、ついで如何なる建築様式なるかを吟味

して後、社務所に行き、更に寶物館で澤山の靈寶を拜見させていただく。古文書類は、

自嘉吉三年十二月十日至寛文元年辛丑十二月四日

諏訪大明神御渡注進狀 七十二通

後奈良天皇女房奉書 はんし遊院西堂充 一通

諏訪神名ノ事

同天皇女房奉書 はんし遊院西堂充 一通

大明神へ心經御奉納ノ事

永祿八年乙丑十一月朔日武田信玄諏訪下社祭祀再興定書

永祿八年乙丑十二月五日同人諏訪上宮祭祀再興定書

永祿八年乙丑十二月七日同人同宮祭祀定書 大祝等六名充

永祿八乙丑年十二月十日同人同宮小立増御頭規式書

大祝等六名充

永祿八乙丑年十二月十日同人同宮祭祀再興定書

同日、同人、同宮祭禮費用定書 同充

永祿八年乙丑十二月十一日同人同宮湛神事再興定書 同充

同日、同人、同宮祭禮退轉帳 同充

永祿九丙寅年九月三日同人同宮祭禮再興定書

同日、同人、同宮末社祭禮再興定書

永祿九年丙寅九月晦日、同人諏訪下社造宮改帳

竹居祝等六名充

で、有名な御渡を始め神事に關するものが主であるが、後奈良天皇心經御奉納の女房奉書は最も注意すべきものである。又た天正頃の銘ある神事用の長刀も珍らしい遺物と思はれる。(田中記)

秋晴の日を待たしてあつた自動車に乗つて下社に向ふ。見る山々は秋の日の霧に包まれ、炭焼く煙も紫の色濃く、つゞ振り返れれば、見し上社の森の邊りは赤き黄ろき落葉樹の綠濃き常綠樹の間より垣間洩れて懐しい。走る車上より諏訪湖を見れば、霧は取れ、青黒く光る水面は吹く風に緩く揺れる。水面の波間の白さ彼岸を見れば下諏訪の地方が瞥見してをる、自動車は街路に出た、山と湖水は町竝に變つた。

我々が宿つたぼたん屋の前を過ぎ下社に着いたのは十一時に近かつた。此處で自動車を棄て下社の前の一寸小奇麗な仕出屋に中食を依頼し、其間に『青塚』見學に出かけた。細い路を幾つか曲がり伊木先生の記憶を辿つて行つた。塚は大きな丘をなし、石郭は一丈許りの奥行があるが、今は荒廢に委ねられてある。『青塚』の名稱の出所は不明である。

晝食を待つ間も、秋の日の日射に愉快さ幸福が我々を浸し、笑ふ其の聲は池の鯉の撥る音と共に我々の最終日を飾つた。實に物靜かな旅行である。食後在京の諸先生及び友人に繪葉書を認む。

下社には春社と秋社とがある。我々は先づ秋社に参拜した。下社は上社に比較して其の規模は概して大きいが様式は大體同じである。尤も神社特有の莊嚴神秘の感はやゝ劣つてゐる。それは現代機械文明の世に望むのは無理かも知れん、而して『女工哀史』の發源地とも云ふべき地に於ては。

こゝにも素より『御柱』がある。上社に於てもさうであるが、境内の四方に高く空に向つて突き立つてゐる立木そのまゝに等しい棒柱である。秋社に於ては其の上に×印を幾つか刻み、地上六尺

位の所に『秋』と彫つてある。此の×印は如何なる思考に基づくか不明瞭であるが、或る人は是は空の彼處より神々降臨の際滑り落ち給はざるやう、古代人の案出したものゝ看做してゐる。寫眞を撮つたり繪間堂の額を見て、さて後社務所に上つて古文書類を拜見する。

上諏訪造宮帳

建久二年二月廿一日前右大將家政所下文 捧紀五近永へ

諏訪下宮神領鹽尻西條所當物ノ辨濟ノ命

承久元年十一月十九日右京權大夫平下知狀寫

諏訪下宮領岡野立野兩封左馬使非法停止ノ事

承久二年七月廿五日左馬寮下文寫 信濃國十九牧司等へ

立野念野兩牧ヲ諏訪社下宮社領トスベキ事

元享三年七月廿七日關東下知狀 社領鹽尻郷東條ノ地頭神役ヲ

抑留セルヲ辨濟セシムル事

貞治五年二月九日信濃守源朝臣長基寄進狀 諏訪下社へ

鹽尻郷東條ノ寄進

貞治六年卯月十三日十九牧大使幸舞狀

辰野岡野兩牧ノ事

至徳貳年六月廿五日修理亮證狀

諏訪大祝充、下社領岡屋辰野兩牧ノ事

應永七年六月十一日信濃守某安堵狀

諏訪大祝充、筑摩郡春近領鹽尻東西以下ノ安堵

外、寶徳三年大膳大夫ヨリ諸所ノ安堵狀二通アリ

天正六年二月廿八日武田氏朱印定書 三澤平太充

造宮錢請取ノ命

天正六年戊刀二月造宮手形

後水尾天皇宸筆御和歌

その外、鏡、鈴等もあつたが、有名な賣神祝印が帝室博物館さかへ提出されてゐて拜見できなかったのは最も残念なことであつた。

秋社を辭した我々は秋の晝下りの暑い日中を春社へさ長い大通りを歩いた。上社下社の二宮の中で静寂さを求めればこの春社であらう。然し其の參道に比較し其の境内は小規模である。此社の『御柱』は『春』と刻まれてある。歸路は三々伍々參道の傍の柳、流れ、亦此地の特色である繭倉庫の土藏作りに目を轉じ、紡績工場と湖水とを有する諏訪の地を離れるのである。

中秋の午後の熱さに幾らか物憂さを感じた。然し其の物憂さも人間、喧騒、ネオン・サインの交流、錯綜の巷へ歸る期待は我々を元氣にさせ、旅行の行程の終るのが惜まれもした。然し旅行は直ぐに終るのである。改札し初めた。やがて四時三十五分發の飯田町行き列車は眞黒になつた身體を下諏訪の構内に入れた。

汽車は六人に乗せて東京へさ長い餘音の残る氣笛を投げ棄て、出發する。秋の夕は暮易く、靄が一杯かゝつてゐる。トランプにも飽きた四人は煙草、菓子、雑談とテンポを進めた。夜は冷えるレインコートの襟を立て、吐絶へる雑談の間に規則的な週期的な轍の軋る音に夜の深さを知る。硝子を拭いて窓越に空を見れば星が奇麗である。明日も澄み切つた青空を訪れて來るだらう。我々は明日の事を考へながら、夢の和やかな世界に搖られて行つた。

「終り」(篠崎記)

寄贈交換圖書雜誌目錄

Ex Libris y Bibliotecas de Mexico La gestion Diplomatica del

Doctor Mora.

Bibliografía de la Reforma la Intervencion y el Imperio.

Bibliografía de la Revolucion Mexicana La Opinion universal sobre

La Doctrina Estrada.

以上 secretaria de relaciones exteriores Mexico. 以下學譯

安岡正篤著 日本武道と宮本武藏 金 雜 學 院

尾崎久彌著 江戸文學研究 三卷別冊第二第三 尾 崎 久 彌 氏

武谷水城氏述 元寇の梗概 海軍協會福岡支部

日本海々岸に於ける石器件出銅鑛の研究 直良石器時代

集刊 第二本第二分 國立中央研究所

安岡正篤著 政治と改革 金 雜 學 院

國史回顧會紀要 六、七 國史回顧會

龜井一雄著 大儒佐藤一齋 金 雜 學 院

延喜式内 上野十二社巡拜の栞 上毛郷土史研究會

防長史學 二ノ一 防長史談會

備後史談 七ノ七、八、九 備後郷土史會

蝦夷往來 四 尙古堂書店

風俗研究 一三四、一三五、一三六 風俗研究會

福岡 五〇 東西文化社